

## 所知についての問題

芳村 修基

ここに、所知というのは、かならずしも梵語の (jñeṣya) を翻譯したのではないが、この (jñeṣya) の語を手掛りとして、佛教における知識の問題をすゝめてみたいのである。すなわち、佛教においては、知慧ということをしきりに主張しながらも、その知慧が、一般にいう知識のなかにおいて、はたして如何ような位置を占めているのであるか、ということである。よく聞かされることであるが、佛教は智の教である、とさえいわれてきた。しかもよく、たんなる智ではない、ともくり返されている。

しかし、智といつても、その原語についていえば、(prajñā)であるか、それとも (jñāna) であるか、ないし (matī) というような語もあつて、いちようではない。

般若 (prajñā) は、もちろん智 (jñāna) と區別されねばならないが、その般若といえども、學説によつてはいろいろと見解を異にしてくるようである。『大智度論』卷第十一（正・二五、一三九頁下）における般若波羅蜜の釋義によれば、(一)般若波羅蜜は無漏の慧根である、とか、及至(七)般若波羅蜜は、不可得の相、有・無に非らざる相である、といった七種の説を列擧した後、著者自身としては、

この般若の中には、有も亦無く、無も亦無く、非有非無も亦無く、

是の如きの言説も亦無し、是を寂滅無量無戲論の法と名づく。といつて、いわゆる「讚般若波羅蜜偈」（正・二五、一九頁中）に應ずる意をうちだし、般若波羅蜜は不可得の相である、という第七の説にもとづいて、五蘊、十二處、十八界におさめられないことをもつて、正しい義としている。

これに對して、『瑜伽師地論』卷第四三の菩薩地（正・三〇、五二八頁下―五二九頁上）においては、菩薩の般若波羅蜜多を解明するにあたつて、その般若を九種の面から考察している。すなわち、その第一として、般若というのは「一切の所知に悟入する」ことをもつて、般若本來の義であるとし、菩薩の般若もそうでなければならぬ、としている。

所知というのは、この場合、内明、因明、醫方明、工巧明の五明處のことであつて、いはゞ、世間一般に認容されている知識のことである。『同論』によれば、般若はこの意味における所知を眞實にしたがつて覺したものでなければならぬ、とし、それがためには、すべての法における平等性を悟つて、すべてに共通する終極性に達し、所知のすべての極限を究め、主觀にもとづく妄想や壓世の考え方を離れ、中道に順入したものでなければならぬ、とし、たとえ般若は所知に悟入することである、といつても、眞實性をそなえた所知とならねばならないことを強調している。そうして、あらゆる所知の境界を了知する無障礙智を達成することは最も困難であることを述べ、ついで、かようにして達成された般若が、(一)あるいは微細慧といわれたり、(二)周備慧とよばれるのであるとし、その理由として、(一)所知の如所有性に悟入し、(二)所知の盡所有性に悟入しているからである、と説いている。

般若についてのこのような二つの解繹の傾向が、インド佛教の後期でいう中觀と瑜伽との區別となつたり、チベット教學でいう一方を甚深とみなすのに對して、他方を廣大として特徴づけるようになつたのではないが。すなわち、一方は般若と所知の世界を區別し斥けようとするのに對して、他方は所知の世界を認容し、所知の世界において般若の成立を追究せんとする態度となり、それが瑜伽行派の道を方向づけているのではないか、とおもわれる。かような所知の世界を明かにせんとするのが、識と智との區別であろう。

識と智というのは、その特質によつていちおう分かれたるもの、いずれもみぎのごとき般若を根底とする所知の世界において成立するものでなければならぬ。若しそうでないならば、例えば、言語や文字による經や論のあらわす意味や佛像や佛畫の存立する意味がなくなつてくるであらう。現に、わたしが名號に歸依し、名號の意味を示す經典に歸依し、そのことを説く人に歸依する以外に、どこに三寶に歸依する、ということがありえようか。しかし、かようなことのみが所知の世界ではない。すなわち、所知の世界は、あるときには識といわれ、ある場合には智といわれるごとき構造をそなえているのである。この意味における所知を『集論』卷第二(正・三一、六七頁上・中)においてはつぎのように叙べている。

云向所知ニソウシチ。幾ニシ。是所知ニシ。爲ニシ。何義ニシ。故觀ニシ。所知ニシ。耶ニシ。という問を設けて、まずその第一の所知(jñeya)とは何であるかについてつぎのように答えている。

謂ニシ。所知ニシ有五種ニシ。一色ニシ。二心ニシ。三心所有法ニシ。四心不想應行ニシ。五無爲ニシ。

若ニシ。於ニシ是處ニシ。雜染ニシ。清淨ニシ。若ニシ。所雜染ニシ。及所清淨ニシ。若ニシ。能雜染ニシ。及能清

所知についての問題(芳村)

淨ニシ。若ニシ。於ニシ此分位ニシ。若ニシ。此清淨性ニシ。由ニシ依此ニシ。故ニシ一切皆所知ニシ。  
jñeyani pañcam/ rūpaṃ cittaṃ caitasika dharmas citta-  
vīryakṛtāḥ samskāra āsamskrītaṃ ca/

yātra saṃkleśo vyavadānaṃ vā yat saṃkliṣyate vyavadāyate  
vā yā ca saṃkleśāyati vyavadāyati vā yā catatra avasthā  
yā ca vyavadānatā tad āśrayeṇa sarvaṃ jñeyam// (Pralhad  
Pradhan, Abhidharma samuccaya of Asanga, p. 16)

と定義している。文は、『雜集論』(正・三一、七〇五頁上中)の意からするならば、色や形によつて、そこに心の貪欲とか信などの働きから、心が垢されたり淨められること、ないしそれらの状態とそうして清淨性とが所知のすべてであるごとく、理解される。この定義によれば、所知の世界は、あるいは雜染ともなり、または清淨ともなりうることでなければならぬ。

然らば、清淨とは云何なることであるか、といえ、『集論』は、この定義によつて、所知の法とは信解智とかないし大義智などの十三智の所行であることを明かにし、そのような智の對象となることによつて、所知の意味があらわされる、としている。

所知障ニシというものは、かゝる智の對象となることを障げる諸條條なり諸要因であつて、いわゆる雜染となつて、みぎ清淨に待するのである。かような雜染と清淨について詳述するのが、『攝大乘論』における所知依、所知相、入所知相の諸章であり、さらにすゝんで、所知障所行眞實へ展開することによつて、まさしく知識の問題となつてくるのではないか、とおもう。